

やりました」

黄金姫「ア、さうだろ、お前の身魂を見込んでア、言つたのだ。本当の事をいつてやりたかつたが、怪しい奴がついてゐたので、あんなスゲない事を言つたのだから、気を悪うせないで置いて下さい」

レープ「どうしてどうして御勿体ない、気を悪ういたしませうかい、サアこれから参りませう」

と話ををりしも、吹来る風につれて聞こえる人馬の物音、金鼓の響、矢叫びの声、物凄くも此方に向かつて進み来る。黄金姫は立ち上がり、

「サアこれからが本当の神軍と魔軍との戦争だ。清照姫、用意をなされ。レープ、覚悟はよいか……」

(大正十一年十月二十九日 旧九月十日 松村真澄録)

(昭和十年六月十日、王仁校正)

附録 大祓祝詞解

(一)

大祓祝詞は中臣の祓とも称へ、毎年六月と十二月の晦日をもつて大祓執行に際し、中臣が奏上する祭文で延喜式に載録されてある。

従来この祝詞の解説は無数に出てるが、全部文章辞義の解釈のみに拘泥し、その中に籠れる深奥の真意義には、ほとんど一端にさへ触れてゐない。はなはだしきは本文の中から「己が母犯せる罪、己が子犯せる罪、母と子と犯せる罪、子と母と犯せる罪、畜犯せる罪」の件を削除するなどの愚劣を演じてゐる。自己の浅薄卑近なる頭脳を標準としての軽率妄動であるから、神界でも笑つて黙許に附せられてゐるのであらうが、実は言語道断の所為といはねばならぬ。

大祓祝詞の真意義は古事記と同様に、大本言霊学の鍵で開かねば開き得られない。さもなければ古事記が一の幼稚なる神話としか見えぬと同様に、大祓祝詞も下らぬ罪惡の列挙、形容詞沢山の長文句くらゐにしか見えない。ところが一旦言霊の活用をもつてその秘奥を開いて見ると、偉大といはうか、深遠といはうか、ただただ驚嘆の

外はないのである。我が国体の精華がこれによりて發揮せらるるは勿論のこと、天地の経綸、宇宙の神秘は、精しきが上にも精しく説かれ、明らかなる上にも明らかに教へられてゐる。これを要するに皇道の真髓は、大祓祝詞一篇の裡に結晶してゐるので、長短粗密の差異こそあれ、古事記、および大本神諭とその内容は全然符節を合するものである。

言靈の活用がほとんど無尽蔵であるごとく、大祓祝詞の解釈法も無尽蔵に近く、主要なる解釈法だけでも十二通りあるが、なるべく平易簡単に、現時に適切と感ぜらるる解釈の一つをこれから試みようと思ふ。時運はますます進展し、人としての資格の有無を問はるべき大審判の日は目前に迫つてゐるから、心ある読者諸子は、これを読んで、真の理解と覚醒の途に就いていただきたい。

〔一〕

「高天原に神つまります、皇親神漏岐、神漏美の命もちて、八百万の神等を神集へに集へ賜ひ神議りに議り玉ひて、我皇孫命は豊葦原の水穂の国を、安国と平けく所知食と事依し奉りき」

△高天原に「タカアマハラ」と読むべし、従来「タカマガハラ」または「タカマノハラ」と読めるは誤りである。古事記の巻頭の註に「訓高下天云阿麻」と明白に指示されてをりながら、従来いづれの学者も之を無視してゐたのは、ほとんど不思議なほどである。

一音づつの意義を調べれば、タは対照力なり、進む左なり、火なり、東北より鳴る声なり、父なり。またカは輝くなり、退く右なり、水なり、西南より鳴る声なり、母なり。父を「タタ」といひ、母を「カカ」と唱ふるのもこれから出るのである。またアは現はれ出る言靈、マは球の言靈、ハは開く言靈、ラは螺旋の言靈。すな

はち「タカアマハラ」の全意義は全大宇宙の事である。

もつとも、場合によりては全大宇宙の大中心地点をも高天原といふ。いはゆる宇宙に向かつて号令する神界の中府所在地の意義で「地の高天原」と称するなどがそれである。この義を拡張して小高天原は沢山あるわけである。一家の小高天原は神床であり、一身の小高天原は、臍下丹田であらねばならぬ。ここでは後の意義ではなく、全大宇宙その物の意義である。これを従来は、地名であるかのごとく想像して、地理的穿鑿を試みてゐたのである。

△神つまります かみは日月、陰陽、水火、靈体等の意義なり。陰陽、水火の二元相合して神となる。皇典にいはゆる産靈とはこの正反対の二元の結合を指す。日月地星辰、神人その他宇宙万一切の發生顕現はことごとくこの神秘なる産靈の結果でないものはない。またつまりとは充実の義で、鎮坐の義ではない。まずはましますと同じ。

△皇親 皇(スメラ)は澄ますの義、全世界、全宇宙を清澄することを指す。親(ムツ)は「ムスピツラナル」の義で、すなはち連続として継承さるべき万世一系の御先祖の事である。

△神漏岐、神漏美 神漏岐は靈系の祖神にして天に属し、神漏美は体系の祖神にして地に属す。すなはち天地、陰陽二系の神々の義である。

△命もちて 命(ミコト)は神言なり、神命なり。すなはち水火の結合より成るところの五十音を指す。元來聲音は、「心の柄」の義にて、心の活用を生ずる限り、これを運用する聲音がなければならぬ。心(即ち靈魂)の活用を分類すれば、奇魂、荒魂、和魂、幸魂の四魂とこれを統括するところの全靈に分かち得る。いはゆる一靈四魂であるが、この根源の一靈四魂を代表する聲音はアオウエイの五大父音である。宇宙根本の造化作用

は要するに至祖神の一靈四魂の運用の結果であるから、至祖神の御活動につれて必然的にアオウエイの五大父音が先づ全大宇宙間に発生し、そしてその声音は今日といへども依然として虚空に充ち満ちてゐるのだが、あまりに大なる声音なので、あまりに微細なる声音と同様に、普通人間の肉耳には感じないまでである。しかしあまり大ならざる中間音は間断なく吾人の耳朶に触れ、天音地籟一として五大父音に帰着せぬはない。鎮魂して吾人の霊耳を開けば、聴こゆる範囲は更に更に拡大する。

さて前にも述ぶるがごとく、声音は心の柄、心の運用機関であるから、天神の一靈四魂の活用が複雑に赴けば赴くだけ、声音の数も複雑におもむき停止するところはない。その中にありて宇宙間に発生した清音のみを拾ひ集めれば四十五音(父母音を合せて)濁音、半濁音を合すれば七十五音である。これは声音研究者の熟知するところである。拗音、捉音、鼻音等を合併すれば更に多数に上るが、要するにみな七十五音の変形で、あらゆる音声、あらゆる言語は根本の七十五声音の運用と結合との結果に外ならぬ。されば宇宙の森羅万象一切は是等無量無辺の音声即ち言霊の活用の結果と見て差支へない。

これは人間の上に照して見てもその通りである事がよく分かる。人間の心の活用のある限り、これを表現する言霊がある。「進め」と思ふ瞬間にはその言霊は吾人の身体の中府から湧き、「退け」と思ふ瞬間にも、「寝よう」と思ふ瞬間にも、「行らう」と思ふ瞬間にも、その他如何なる場合にも、常にその言霊は吾人の中心から湧出する。すなはち人間の一举一動ごとく言霊の力で左右されるといふても宜しい。従つて言霊の活用の清純で、豊富な人ほど其の使命天職も高潔偉大でなければならぬ。

△八百万の神等 万百のやは人、ホは選良の義、万は沢山、多数の義である。
△神集へに云々 神の集会で神廷会議を催すことである。

△我皇御孫之命 五十音の中でアは天系に属し、ワは地系に属す。ゆゑに至上人に冠する時に我はワガと言はずしてアガといふなり。皇(スメ)は澄まし治め、一切を見通すこと、御(ミ)は充つる、円満具足の義、孫

(マ)はマコトの子、直系を受けたる至貴の玉体。命は体異体別の義、すなはち独立せる人格の義にして、前に出でたる命(神言)から発足せる第二義である。全体は単に「御子」といふことである。元来、霊も体もその根本に溯れば、みな祖神の賜、天地の賜である。ゆゑに皇典では常に敬称を附するをもつて礼となし、人間に自他の区別は設けられてないのである。

△豊葦原の水穂国 全世界すなはち五大洲のことである。これを極東のある国のこととせるが従来の学者の謬見であつた。日本をさす時には、豊葦原の中津国、または根別国などと立派に古事記にも区別して書いてある。

△所知食 は衣食住の業を安全に示し教ふることをいふ。地球は祖神の御体であるから、人間としては土地の領有権は絶対に無い。たとへば人体の表面に寄生する極微生物に人体占領の権能がないのと同様である。人間は神様から土地を預かり、神様に代はりてこれを公平無私に使用するまでである。うしはぐ(領有)ものは天地の神で、主権者はあくまで知ろしめすであらねばならぬ。国土の占領地所の独占等は、根本から天則違反行為である。神政成就の暁には独占は無くなつてしまふ。

【大意】 全大宇宙間には陰陽二系の御神霊が実相充塞し、それは即ち一切万有の父でありまた母である。陰陽二神の神秘的産霊の結果は、先づ一切の原動力ともいふべき言霊の発生となつた。いはゆる八百万の天津神の御出現であり、御完成である。天界主宰の大神は、いふまでもなく天照皇大神様であらせらるるが、その次ぎにおこる問題は地の世界の統治権の確定である。ここにおいて神廷会議の開催となり、その結果は天照大神様の御霊統を受けさせられた御方が全世界の救済に当らるることに確定し、治国平天下の大道を執行監督さるべき天

の使命を帯びさせらるる事になつたのである。無論人間の肉体は世に生死往来するを免れないが、その靈魂は昔も今も変はることなく千万世に亘りて、無限の寿を保ちて活動さるるのである。

(二)

かく依さし奉りし國中に荒振神等をば、神問はしに問はし玉ひ、神掃ひに掃ひ給ひて、語問ひし磐根樹立草の片葉をも語止めて、天之八重雲を伊頭の千別に千別て、天降し依さし奉りき。

△荒振神 天界の御命令にまつるはぬ神、反抗神の意である。

△神問はしに云々 神の御会議。罪あるものは、神に向ひて百万遍祝詞を奏上すればとて、叩頭を続ければとて、それで何の効能があるのではない。いはんや身慾信心に至つては、言語道断である。神様に御厄介を懸けるばかり、碌な仕事もせぬくせに、いざ大審判の開始されむとする今日、綾部を避難地でもあるがごとくに考ふるやうな穿き違ひの偽信仰は、それ自身において大罪悪である。神はまづそんな手合から問はせらるるに相違ない。

△神掃ひに云々 掃ひ清むること、神論のいはゆる大掃除 大洗濯である。

△語問ひし 諸々の罪の糾弾である。

△磐根樹立 草の枕詞、即ち磐の根に立てる樹木の、そのまた根に立てる草の義。

△草の片葉 草は青人草、人のこと、また片葉は下賤の人草の意である。

△語止めて 議論なしに改悟せしむるの意である。

△天之磐座放ち 磐座は高御座なり。いはもくも共に巖石の義。放ちは離ちなり。古事記には、「離三天之石位」とあり。

△八重雲 弥が上にも重なりたる雲。

△伊頭の千別に云々 伊頭は稜威なり。すなはち鋭き勢ひをもつて道を別けに別けの義。

△天降し依さし奉りき 「天降し……の件を依さし奉りき」の義にて中間に神秘あり。天降しは天孫をして降臨せしむること、換言すれば天祖の御分霊を地に降し、八百万の国津神達の主宰として神胤が御発生あることである。

【大意】すでに地の神界の統治者は確定したが、何しろ宇宙の間はなほ未製品時代に属するので、自由行動を執り、割拠争奪を事とする兇徒界が多い。これは最も露骨に大本開祖の御神諭に示されてゐるところで、決して過去の事のみではない。小規模の救世主降臨は過去にあつたが、大規模の真の救世主降臨は現在である。「七王も八王も世界にあれば、この世に口舌が絶えぬから、神の王で治める経緯が致してあるぞよ」とあるなどは即ちこれを喝破されたものである。その結果これら悪鬼邪神の大審判、大掃除、大洗濯が開始され、いはゆる世の大立替の大渦中に突入する。さうなると批評も議論も疑義も反抗も全部中止となり、稜威赫々として宇内を統治し玉ふ神の御子の世となるのである。

(四)

如此依さし奉りし四方の國中と大日本日高見之國を安國と定め奉りて、下津磐根に宮柱太敷立、高天原に千木多加知りて、皇御孫命の美頭の御舍仕へ奉りて、天の御蔭日の御蔭と隠り坐して、安國と平けく所知食む國中に成出でむ天の益人等が過ち犯しけむ雑々の罪事は。

△四方の國中 宇宙の大中心。

△大日本日高見之國 四方真秀、天津日の隈なく照り巨る国土を称へていふ。ただし宇宙の大修祓が済んでから初めて理想的になるのである。

△下津磐根 地質が一大磐石の地で、即ち神明の降臨ある靈域を指す。「福知山、舞鶴は外圍ひ、十里四方は宮の内」とあるもまた下津磐根である。

△宮柱太敷立 宮居の柱を立派に建てること。

△千木多加知 屋根の千木を虚空(高天原)に高く敷きの義。千木は垂木なり。タリを約めてチといふ。

△美頭 麗はしき瑞々しき意。

△仕へ奉り 御造営の義。

△天の御蔭云々 天津神の御蔭 日の大神様の御蔭と自分の徳を隠したまふ義。神政成就、神人合一の時代においては、人はことごとく神の容器である。世界統一を實行すとして、その功績はこれは天地の御恩に帰し奉るが道の真隨で、忠孝仁義の大道は根源をここから発する。坐ながらにして御威徳は宇内に光被し、世は自然と平らげく安らげく治まるのである。

△天の益人 天は敬称である。益人は世界の全人類を指す。マス、ラ、といふ時は男子のみを指す。マは完全、スは統治の義。またヒは靈、トは留まる義。

△罪事 ツミは積みなり、また包みなり。金錢、財宝、糧食等を山積私有するは個人本位、利己本位の行為で、天則に背反してゐる。また物品を包み隠したり、邪心を包蔵したり、利用厚生の道の開發を怠つたりする事も堕落腐敗の源泉である。かく罪の語源から調べてかかれれば、罪の一語に含まるる範圍のいかに広いかが分かる。法律臭い思想ではとてもその真義は解し難い。

【大意】 天祖の御依託によりて救世主が御降臨遊ばさるるにつきては、宇宙の中心、世界の中心たる国土をもつて、宇内経綸、世界統一の中府と定め給ひ、天地創造の際から特別製に造り上げてある神定の靈域に、崇敝無比の神殿を御造営遊ばされ、惟神の大道によりて天下を知ろしめされる事になる。神論のいはゆる「神國の行ひを世界へ手本に出して、万古末代動かぬ神の世で三千世界の陸地の上を守護」さるのである。それにつきては直接 天津神の手足となり、股肱となりて活動せねばならぬ責任が重い。いかなる事を為ねばならぬか、またいかなる事を為てはならぬか、明確なる觀念を所有せねばならぬ。次節に列挙せらるる雑々の罪事といふのは、ことごとく人として日夕服膺せねばならぬ重要事項のみである。

(五)

天津罪とは、畔放ち溝埋め、樋放ち頻蒔き串差し、生剝逆剝尿戸許々太久の罪を、天津罪と詔別けて、国津罪とは、生膚断、死膚断、白人胡久美、己が母犯せる罪、己が子犯せる罪、母と子と犯せる罪、子と母と犯せる罪、畜犯せる罪、昆虫の災、高津神の災、高津鳥の災、畜産し蟲物せる罪、許々太久の罪出む。

△天津罪 天然自然に賊与せられたる水力、火力、電磁力、地物、砧物、山物、動植物等の利用開發を怠るる罪をいふ。前にも言へる如く、いはゆる積んで置く罪、包んで置く罪なり。宝の持腐れをやる罪なり。従来は文明の進歩だのといったところが、全然穿き違ひの文明進歩で、一ツ調子が狂へばたちまち饑餓に苦しむやうなり方、現在、世界各国の四苦八苦の有様を見ても、人間が如何に天津罪を犯してゐるかが解る。

神論に「結構な田地に木苗を植ゑたり、色々の花の苗を作りたり、大切な土地を要らぬ事に使ふたり致し、人民の肝腎の生命の親の米、豆、粟を何とも思はず、米や豆や麦は何程でも外国から買へると申してをるが、い

つまでもさう行かぬことがあるから、猫のをる場にも五穀を植ゑ付けねばならぬやうになりて来るぞよ。みな物質本位の教であるから、神の国には神国の世の行方方に致さして、モーほつばつと木苗も掘り起「こさせるぞよ」とあるなどは、実に痛切骨に徹する御訓戒である。

現在の神国人ととも、欧米人と同じく決して天津罪人の数には漏れぬ人間ばかりである。採鉱事業などになると、今の人間はよほど進歩してゐる所存であるが、試掘と分析くらゐで地底に埋没せる金銀宝玉等が出るものではない。これに比べると、幾分靈賞を加味した佐藤信淵の金氣観測法などの方がどれだけか進歩してゐる。神霊の御命令と御指示がなくんば、金銀その他は決して出ない。大本神論に「五六七大神のお出ましにお成りなさるるにつき、国常立尊が現はれるなり、国常立尊が現はれると、乙姫殿は次ぎに結構な大望な御用ができて、乙姫殿のお宝を上げて新規の金銀を……。二度目の立替をいたして、何も新規に成るのであるから、乙姫殿の御財宝を綾部の大本へ持ち運びて、新規の金銀を吹く準備をいたさな成らぬから云々」とあるなどは、時節到來と共に実現して、物質万能機械一点張りの連中を眩苦たらしむ事柄なのである。

また現在 人士は電力、火力、水力、その他の利用にかけて、よほど発達進歩を遂げた心算であるが、一步高所から遠観すると、利用どころか悪用ばかり、間接または直接に人類の破滅、天然の破壊に使用されぬものが幾何かある。是等の点にかけて現在の人士は、いはゆる知識階級、学者階級ほど血迷ひ切つてゐる、天津罪の犯罪者である。

△畔放ち 天然力、自然力の開発利用のこと。畔(ア)は当字にてア、メを約めたものなり。田の畔を開つなどは単に表面の字義に囚はれたる卑近の解釈である。

△溝埋め 水力の利用を指す。埋めには補足の義と生育の義とを包む。湯に水をうめる、根を土中にうめる、種

子を地にうめる、孔をうめる、鶏が卵をうむなど参考すべし。
 △種放ち 種は火なり。電気、磁気、蒸気、光力等天然の火力の開発利用を指す。
 △頻蒔き 山の奥までも耕作し不毛の地所などを作らぬ事。頻(シキ)は、敷地のシキなり、地所なり。蒔きは捲きなり、捲き収めるなり、席卷なり、遊ばせて置かぬなり。遊獵地や、クリケツト、グラウンドなどに広大な地所を遊ばせて、貴族風を吹かせて、傲然たりし某国の現状は果して如何。彼らが世界の土地を横領せる事の大なりしだけ、彼らが頻蒔の天則を無視せる罪悪も蓋し世界随一であらう。しかしその覚醒の時もモウ接近したこれではならぬと衷心から覚る時はモウ目前にある。イヤ半分はモウその時期が到着してゐる。しかしこれは程度之差違だけで、その罪は各国とも皆犯してゐる。

△串差し カクシサガシの約にて、前人未発の秘奥を発見する事。
 △生剥き 一般の生物の天職を開発利用する事。生物といふ生物はことごとく相当の本務のあるもので、軽重大小の差異こそあれ、それぞれ役目がある。鼠でも天井に棲みて人間に害を与ふる恙虫などを殺すので、絶對的有害無効の動物ではない。剥きは開く義、発揮せしむる義なり。蚕をはぐなどの語を参考すべし。
 △逆剥 逆(サカ)は、栄えのサカなり。酒などもこの栄えの意義から発生した語である。剥(ハギ)は生剥の剝と同じく開発の義。すなはち全体の義は栄え開くことで、廃物をも利用し荒蕪の地を開墾し、豊満美麗の楽

天地を現出せしむることを指す。
 △尿戸 宇宙一切を整頓し、開発する義。クは組織経綸、ソは揃へること、整頓すること。へは開発すること。
 △許々太久 その他種々雑多の義。

△天津罪と詔別 以上列挙せる天然力、自然物の利用開発を怠ることを、天津罪と教へ給ふ義なり。

△国津罪 天賦の国の徳、人の徳を傷つくる罪を指す。

△生膚断 天賦の徳性を保ちある活物の皮膚を切ることなり。必要も無きに動物を害傷し、竹木を濫伐する事等はやはり罪悪である。靈氣充滿せる肉体に外科手術を施さずとも、立派に治療する天賦の性能を有してゐる。人工的に切断したり切開したりするのは天則違反で、徒らに人体毀損の罪を積めるわけになる。

△死膚断 刃物をもつて生物一切を殺す罪。

△白人胡久美 白昼姦淫のこと。白日床組といふ醜穢文字を避け、わざと当字を用いたのである。淫慾は獣肉嗜の影嚮を受けてゐるが、元來はこの点においては世界中で最も淡白人種である。淫慾の結果は肺病となり、また癩病となるゆゑに、白人胡久美を第一義に解釈すれば、白人は肺病患者、または白癩疾者を指し、胡久美は黒癩疾者を指す。

△己が母犯せる罪 母の一字は、父、祖先、祖神等をも包含し、極めて広義を有するのである。大体において親といふ如し。犯すとはその本来の権能を無視する義なり。換言すれば親、祖先、祖神に対して不孝の罪を重ぬることである。

△己が子犯せる罪 自己の子孫の権能を無視し、非道の虐待酷使を取てすること。元來自分の子も、実は神からの預かり物で、人間が勝手にこれを取扱ふことはできない。それにやたらに親風を吹かせ、娘や倅などを自己の食ひ物にして顧みぬなどは甚だしき罪惡といふべきである。

△母と子と犯せる罪 子と母と云々 上の二句「己が母犯せる罪、己が子犯せる罪」をさらに疊句として繰返せるまでで別に意義はない。

△畜犯せる罪 獸類の天賦の徳性を無視し、酷待したり、殺生したりすること。

△昆虫の災 天則違反の罪をいふ。蚊、ムカデなどに刺されるのはみな偶然にあらず、犯せる罪があるにより、天罰として刺されるのである。故にかかる場合には直ちに反省し、悔悟し、謹慎して、神様にお詫びを申し上げべきである。

△高津神の災 天災、地変、氣候、風力等の不順は皆これ高津神の業にして、罪過の甚い所に起るのである。災は業はひなり、所為なり。鬼神から主観的に観れば一の所為であるが、人間から客観的に観れば災難である。今度の国祖の大立替に、雨の神、風の神、岩の神、荒の神、地震の神、その他八百万の眷屬を使はるるのも、祝詞のいはゆる高津神の災である。みな世界の守護神、人民の墮落が招ける神罰である。

△高津鳥の災 鳥が穀物を荒す事などを指すので、やはり神罰である。

△畜殮し 他家の牛馬鶏豚等を斃死せしむること。一種のマジナヒなり。

△蠱物 呪咀なり、マジナヒ物なり。丑の時参りだの、生木に釘を打つだのはみな罪惡である。

【大意】 人間は神の容器として宇内経綸の天職がある。殊に日本人の使命は重大をきはめ、世界の安否、時運の興廢、ことごとくその責任は日本人に係るのである。神論に「日本は神の初発に修理へた国、元の祖國であるから、世界中を守護する役目であるぞよ。日本神國の人民なら、チトは神の心も推量いたして、身魂を磨いて世界の御用に立ち下されよ」とある通り、天賦の靈魂を磨き、天下独特の靈智靈覺によりて、天然造化力の利用開發に努めると同時に、他方においては天賦の国の徳、人の徳を發揮することに努め、そして立派な模範を世界中に示さねばならぬのである。しかるに實際は大いにこれに反し、いたづらに物質文明の糟粕を嘗め、罪の上に罪を重ねて現在見るがごとき世界の大擾乱となつてきた。無論日本人はこの責任を免るる事はできない。

しかしこれは天地創造の際からの約束で、進化の道程として、蓋し免れ難き事柄には相違ない。さればこの祝詞の中に「許々太久の罪出む」とあり、また国祖の神論にも「こうなるのは世の元から分かつてある」と仰せられてゐる。要するに過去の事は今更悔むには及ばぬ。吾々は現在および将来に向かつて、いかなる態度を執り、いかなる処置を講ずれば宜いかを考究すべきである。次節にその要道を示されて居る。

(六)

如此出でば、天津宮言以て、天津金木を本打切末打断て、千座の置座に置足はして、天津菅曾を本打絶末打切て、八針に取裂きて天津祝詞の太祝詞言を宣れ、如此宣らば、天津神は天の磐戸を推披きて、天の八重雲を伊頭の前別に千別て所聞召む。国津神は高山の末短山の末に登り坐て、高山の伊保理短山の伊保理を撞分けて所聞召む。

△天津宮言 宮言は「ミヤビノコトバ」の義なり。正しき言霊なり。宇宙の経綸は言霊の力によりて行はるる事は、前にも述べた。わが天孫民族は世界の経綸を行ひ、天下を太平に治むべき、重大なる使命を帯びてゐる。しかるに現在は肝腎の日本人が、靈主体従の天則を誤り、天津罪、国津罪、数々の罪を重ねて、その結果世界の大擾乱を来たしてゐる。これを修祓し、整理するの途は、言霊を正し、大宇宙と同化するが根本である。換言すれば、肚の内部から芥塵を一掃し、心身ともに浄化して、常に善言美詞のみを発するやうにせねばならぬ。悪声、放ち、藤口をきき、又は追従、輕薄を並べるやうな人間は、それだけでその人格の劣悪なことが分る。世界の経綸どころか人として次ぎの新理想時代に生存すべき資格の有無さへ疑問である。日夕祝詞を奏上しても、こんな肝要至極の点が、さつぱり実行が出来ぬでは仕方がない。お互ひに反省の上にも反省を加へねばならぬことと思

ふ。

△天津金木 則 神算木なり。周易の算木に相当するものであるが、より以上に神聖で正確である。本来は長さ二尺の四寸角の檜材なのであるが、運用の便宜上、長さ二寸の四分角に縮製さる。その数三十二本を並べて、十六結を作製し、その象を観て、天地の経綸、人道政事一切の得失興廢等を察するのである。それは宇内統治の主が大事に際して運用すべきもので、普通人民がやたらに吉凶禍福などを卜するに使用すべきものではない。無意無心の器物を用ゐて神勅を受くるのであるから、ややもすれば肉体心の加味し勝ちな普通の神憑りよりも、一倍正確な事は言ふまでもない。

△本打切末打断 神算木を直方形に作製する仕方を述べたまでである。

△千座の置座云々 無数の神算木台に後からズンズン置き並べること。

△天津菅曾 周易の筮竹に相当するが、その数は七十五本である。これは七十五声を代表するのである。長さは一尺乃至一尺二寸、菅曾は俗称「ミンソハギ」と称する灌木、茎細長にして三四尺に達す。これを本と末とを切り揃へて使用するなり。

△八針に取裂て 天津菅曾の運用法は先づ総数七十五本を二分し、それから八本ずつ取り減らし、その残数によりて神算木を配列するのである。

△天津祝詞の太祝詞 すなはち御禊祓の祝詞のことで、正式に奏上する場合には、ここで「天津祝詞」を奏上するのである。大体において述べると、あの祝詞は天地間一切の大修祓を、天神地祇に向かつて命ぜらるる重大な祝詞である。太(フト)は美称で、繰返して、天津祝詞を称へたまでである。

△宣れ 神に向かつて願事を奏上するの義なり。

△天の磐戸 天津神のまします宮門から御出動の義にて、人格的に写し出せるのである。
△伊頭の千別云々 前に出たから略す。

△国津神 地の神界に属する神々、および靈魂の神をもつて成立し、各自の靈的階級に応じて大小高下、それぞ
れの分担権限を有す。

△高山の末云々 末は頂上の義。

△伊保理 隠棲なり、隠れたるなり、伊保理の伊保も、いぶかしのいぶも、烟などのいぶるも、皆通音で同意
義である。

【大意】 天津罪、国津罪の続発は悲しむべき不祥事ではあるが、出来た上は致しかたがない。よく治乱興廢、得
失存亡の理を明らかにし、そして整理修祓の法を講ぜねばならぬ。世界主宰の大君としては、天津金木を運用し
て宇内の現勢を察知し、そして正しき言靈を活用して、天津祝詞を天津神と国津神とに宣り伝へて、その活動を
促すべきである。これが根本の祭事であると同時に、また根本の政事であつて、祭と政とは決して別途に出づる
ものではない。さうすると、天津神も国津神もよくこれに応じて、威力を発揮せられる。神諭のいはゆる「罪穢
の甚い所には、それぞれの懲罰がある」または「地震、雷、火の雨降らして体主靈従をつぶす」といふやう
な神力の發動ともなるのである。

〔七〕

如此所聞食ては、罪といふ罪は不在と、科戸の風の八重雲を吹放つ事の如く、朝の御務夕の御務を、朝
風夕風の吹掃ふ事の如く、大津辺に居大船を、船解放ち船解放ちて大海原に押放つ事の如く、彼方の繁木が

本を、燒鎌の敏鎌以て打掃ふ事の如く、遣る罪は不在と、被賜ひ清め玉ふ事を。
△かく所食ては きこしめすの意義は、単に耳に聴くといふよりも遙かに広く深い。きくは利くなり。腕が利
く、鼻がきく、眼がきく、酒をきく、(酒の品位を飲み分けること) などのきくにて、一般に活用を発揮し、威
力を利用する義である。天津神、国津神たちが整理修祓の命に応じて活動を開始することを指していふ。

△罪といふ罪は不在と 罪といふ限りの罪は一つも残さずの意。
△科戸の風の云々 以下四聯句は修祓の形容で、要するに「遣る罪は不在と被賜ひ清め賜ふ」ことを、麗しき
文字で比喩的に描いたものである。科戸は風の枕詞、古事記にこの神の名は志那都比古と出である。シは暴風

(アラシ)のシと同じく風のことである。ナはノに同じく、トは処の義。

△朝の御務云々 御務は深き霧の義。

△朝風夕風云々 朝風は前の「朝の御務」にかかり、夕風は「夕の御務」にかかる。

△大津辺に居る云々 地球において、肉体を具備されたる神の御出生ありしは、琵琶湖の竹生島からは、多紀理
毘売命、市寸島比売命、狭依毘売命の三女神、また蒲生からは天之善卑能命、天津彦根命、天之忍穗耳
命、活津日子根命、熊野久須毘命の五彦神が御出生になつた。これが世界における人類の始祖である。かく
琵琶湖は神代史と密接の関係あるがゆゑに、沿岸附近の地名が大祝祝詞中に数箇所出である。大津の地名もか
くして読み込まれたものである。

△船解放ち云々 泊りある時に船艚を繋いでおくが、それを解き放つ意。

△大海原 海洋なり。

△繁木が下 繁茂せる木の下の。

△焼鎌の敏鎌 焼鎌とは、鎌で焼きて造る故にいふ。敏鎌は利き鎌の義。
△遺る罪は不在と 前に「罪といふ罪は不在」とあるのに、更に重ねてかく述ぶるは、徹底的に大修祓を行ふことを力強くいひなしたのであらう。

【大意】 八百万の天津神と国津神との御活動開始となると、罪といふ罪、穢といふ穢は一つも残らず根本から一掃されてしまふ。大は宇宙の修祓、国土の修祓から、小は一身一家の修祓に至るまで、神力の御発動がなければ、たうてい出来るものではない。ことに現代のごとく墮落しきつた世の中が、どうしても姑息的人為的の処分ぐるんで埒がつくものではない。清潔法執行の声は高くても、ますます疾病は流行蔓延し、社会改良の工夫は種々に凝らされても、動揺不穩の空気はいよいよ瀰蔓するではないか。良之金神 国常立尊が御出動に相成り、世の立替立直しを断行さるるのも誠に万やむを得ざる話である。

されば大祓祝詞は、無論いづれの時代を通じても必要で、神人一致、罪と穢の累積を祓清むるやうに努力せねばならぬのだが、ことに現在においては、それが痛切に必要である。自己の身体からも、家庭からも、国土からも、更に進んで全地球、全宇宙から一時も迅速に邪気妖気を掃蕩して、うれしうれしの神代にせねば、神に対して実に相済まぬ儀ではないか。

大祓祓に際して、神の御活動は大別して四方面に分かれる。いはゆる祓戸四柱の神々のお働きである。祓戸の神といふ修祓専門の神様が別に存在するのではない、正神界の神々が修祓を行ふ時には、この四方面に分かれて御活動あることを指すのである。以下 末段までは各方面の御分担を明記してある。

〔八〕

高山の末短山の末より、作久那太理に落、多岐つ速川の瀬に坐す瀬織津比売と言ふ神、大海原に持出なむ、如此持出往ば、荒塩の塩の八百道の八塩道の塩の八百会に坐す速秋津比売といふ神、持可々呑む。如此可々呑むては、気吹戸に坐す気吹戸主といふ神、根の国底の国に気吹放ちてむ。如此気吹放ちては、根の国底の国に坐す速佐須良比売といふ神、持佐須良比失ひてむ。如此失ひては、現身の身にも心にも罪と言ふ罪は不在と、祓給へ、清め給へと申す事を所聞食と、恐み恐みも白す。

△高山の末云々 高き山の頂、低き山の頂からの義。

△作久那太理に 佐久は谷なり、峽なり。那太理はなだれ落つる義、山から水が急転直下し来たることの形容。

△落多岐つ 逆巻き、湧き上がりつつ落つること。滝、沸る等みな同一語源から出づ。

△速川 急流なり。

△瀬織津比売云々 古事記の伊邪那岐命御禊の段に、「於是詔之上瀬者瀬速。下瀬者瀬弱。而初於中瀬降迦豆伎而。漉時。所成坐神名八十禍津日神、次大禍津日神。此二神者所到其穢繁国。之時因汚垢二而。所成之神者也」と出でゐるが、瀬織津の織は借字にて瀬下津の義、すなはち於中瀬降迦豆伎たまふとある意の御名である。この神はすなはち禍津日神である。世人は大概禍津日神と瀬織津神とを混同してゐるが、

実は大変な間違ひである。禍津神は邪神であるが、禍津日神は正神界の刑罰係である。現界でいへば判検事、警察官、または軍人などの部類に属す。罪穢が発生した場合には、常にこの修祓係、刑罰係たる禍津日神の活動を必要とする。

修祓には大中小の区別がある。大は天上地上の潔斎、中は人道政事の潔斎、小は一身一家の潔斎である。もし地球に瀨織津比売の働きが無くれば、万の汚穢は地上に堆積して新陳代謝の働きが閉塞する。ところが地の水分が間断なく蒸発して、それが雲となり、雨となり、その結果谷々の小川の水が流れ出て末は一つになりて大海原に持出してくれるから、天然自然に地の清潔が保たれるのである。現在は地の表面が極度に腐敗し切り、汚染し切り、邪霊小人時を得頼に跋扈してをる。神諭に「今の世界は服装ばかり立派に飾りて、上から見れば結構な人民で、神も叶はぬやうに見えるなれど、誠の神の眼から見れば、全部四つ足の守護になりてをるから、頭に角が生えたり、尻に尾が出来たり、無闇に鼻ばかり高い化物の覇張る、闇雲の世に成りてをるぞよ」「余り穢うて眼を開けて見られぬぞよ」「ようも爰まで汚したものだ。足片足踏み込む所もない」などと戒められてゐる通りである。

この際は是非とも必要なは、世界の大洗濯、大清潔法の施行であらねばならぬ。ここにおいてか先づ瀨織津姫の大活動と成りて現はれる。七十五日も降りつづく大猛雨などはこの神の分担に属する。到底お手柔らかなことでは現世界の大汚穢の洗濯は出来さうもないやうだ。神諭にも「罪穢の甚大い所には何があるやら知れぬぞよ」と繰返し繰返し警告されてゐる。世界の表面を見れば、そろそろ瀨織津比売の御活動は始まりつつあるやうだ。足下に始まらなくては気がつかぬやうでは困つたものだ。

△荒塩の塩の八百道の云々 全体は荒き潮の弥が上に数多寄り合ふ所の義。八は弥の意、八百道は多くの潮道のこと、八塩道は上の塩の八百道を受け重ねていへるだけである。八百会は沢山の塩道の集まり合ふ所。

△速秋津比売 古事記に「水戸神、名速秋津日子神。次妹秋津比売命」とあるがごとく、河海の要所を受持ちて働く神なり。

△持可々呑てむ 声立ててガブガブ呑むの義なり。汚れたる世界の表面を洗滌するためには、すでに瀨織津比売の働きの起こりて大雨などが降りしきるが、河海の水門水門に本拠を有する秋津比売が、次ぎに相呼応して活動を開始する。大洪水、大海嘯、大怒濤、この神にガブ呑みされては田園も山野も、町村もたまったものではない。いはゆる桑田変じて碧海となるのである。

△気吹戸 近江の伊吹山は気象学上きはめて重要な場所である。伊吹は息を吹く所の義で、地球上に伊吹戸は無数あるが、伊吹戸中の伊吹戸ともいふべきは近江の伊吹山である。最近 伊吹山に気象観測所が公設されたのは、新聞紙の伝ふるところであるが、大本では十年も二十年も以前から予知の事実である。

△気吹戸主 大雨、洪水、海嘯等の活動に続いては、気象上の大活動が伴ふて、妖気邪気の掃蕩を行はねばならぬ。元寇の役に吹き起こつた神風のごときも、無論この伊吹戸主の神の御活動の一端である。

△根の国底の国 地球表面においては北極である。神諭に「今までは世の元の神を、北へ北へ押しこめておいて、北を悪いと世界の人民が申してをりたが、北は根の根、元の国であるから、北が一番善くなるぞよ……」。人民は北が光ると申して不思議がりて、いろいろと学や智慧で考へてをりたが、誠の神が一处に集りて、神力の光を現はしてをる事を知らなんだぞよ」とあるが、真に人間の智慧や学問では解釈の出来ない神祕は、北に隠されてゐる。北光、磁力は申すに及ばず、気流や、気象なども北極とは密接の関係がある。すなはち地球の罪穢邪気は、ことごとく一旦北極に吹き放たれ、ここで遠大なる神力により処分されるのである。ついでに一言しておくが、罪を犯した者が根の国、底の国に落ちるのは、詰まり神罰で、これも一つの修祓法執行の意義である。別に根の国底の国といふ地獄めきたる国土が存在するのではない。何処にゐても神罰執行中は、そこが根の国底の国である。

△速須良比売 佐須良は摩捺(サスル)なり、揉むことなり。空にありては雷、地にありては地震、皆これ佐須良比売の活動である。要するに全世界の大修祓法は、大雨で流し、洪水海嘯等で掃ひ、大風で吹き飛ばし、最後に地震雷で掃つてゆつて掃り滅ぼすのである。それが即ち神諭の世界の大洗濯、大掃除、第二次の大立替である。「天の大神様がよいよ諸国の神に、命令を降しなされたら、良 金神国常立尊が総大将となりて、雨の神、風の神、岩の神、荒の神、地震の神、八百万の眷族を使ふと一旦は激しい」とあるのは、祓戸四柱の神々の活動を指すのである。詳しく言へば雨、荒、風、地震の神々がそれぞれ瀬織津比売、秋津比売、気吹戸主、佐須良比売の神々の働きをされるので、岩の神が統治の位置に立つのである。学問の末に囚はれた現代人は、これらの自然力を科学の領分内に入れて解釈しようとして試みてゐるが、それは駄目だ。実はみな一定の規律と方針の下に行はれるところの神力の大発動である。その事は、今年よりは来年、来年よりは来々年といふ具合に、だんだん世界の人士が承服する事になるであらう。

△所聞食と 八百万の神達に宣り上ぐる言葉である。神々に向かつて活動開始、威力發揮を祈願する言葉である。すなはち天地の神々様も、この宣詞をしつかり腹に入れ、四方面に分かれて、大修祓のために活力を發揮し玉へといふことである。我が惟神の大道がいかに拝み信心、継り信心と天地の相違あるかは、この辺の呼吸を觀ても分かるであらう。

末段 祓戸四柱神の解釈説明を下すに当り、自分は全体の統一を慮り、また大本神諭との一致を失はぬやう、主として地球全体、世界全体経緯の見地から筆を下した。しかしこれは、より大きくも、また小さくも解釈が出来ることは、前にも述べた通りである。宇宙の神人、万有一切のことは皆同一理法に支配せられ、宇宙に真なることは地球にも真、地球に真なることは一身一家にもまた真である。参考のためにここに簡単に他の一二の

解釈法を附記しておく。個人潔齋の上から述べると瀬織津比売の働きは行水、沐浴等のこと、秋津比売は嗽のこと、伊吹戸主は深呼吸などのこと、佐須良比売は冷水摩擦、按摩等のことである。人身生理の上から述べると、瀬織津比売は口中にて食物咀嚼の機能、秋津比売は食道から胃腸に食物を運ぶ機能、気吹戸主は咀嚼して出た乳汁を肺臓に持ち出す機能、佐須良比売は肺臓にて空気に触れ、それから心臓に帰り、そして全身へ脈管で分布せらるる機能を指すのである。かくのごとく大祓祝詞は大小に拘はらず、ありとあらゆる有機組織全部に必要な新陳代謝の自然法を述べたものである。

【大意】さて地球の表面の清潔法施行のためには、まづ大小の河川を司どる瀬織津比売が御出動になり、いよいよよとなれば大雨を降らして、苛くも汚れたものは家庫たると、人畜たるの区別なく大海へ一掃してしまふ。これに應じて速秋津比売の活動が起り、必要あれば逆に陸地までも押し寄せ、あらゆる物を鵜呑みにする。邪気妖氣掃除の目的には気吹戸主神が控へてをり、最後の大仕上げには佐須良比売が待ちかまへて、揉みに揉み砕き、掃りに掃り潰す。これでは如何に山積せる罪穢も、此の世から一掃されて品切れになる。

従来は大祓の祝詞は世に存在しても、その意義すら分からず、従つてその実行が少しも出来てゐなかつた。その大実行着手が国祖 国常立尊の御出動である。神国人の責務は重いが上にも重い。天地の神々の御奮発と御加勢とをもつて、首尾克くこの大経緯の衝に当り神業に奉仕するといふのが、これが大祓奏上者の覚悟であらねばならぬ。(完)